

## 阿部静枝の戦後～歌人、評論家、政治家としての足跡（一）

付 「阿部静枝著作年表〈1945年～〉」及び「阿部静枝関係参考文献一覧」

内野光子

後掲の「阿部静枝関係参考文献一覧」で見ると、本誌『ポトナム』においても、阿部静枝の生涯と短歌については、多くの先達の論稿があり、中野昭子「阿部静枝という歌人」は、二〇一三年から連載中である。筆者自身も、阿年静枝追悼号（一九七五年二月）の年譜と著書解題を執筆以降、何回か執筆の機会があった。近年には、書籍の形で「内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか—付阿部静枝著作年表・戦前編」（拙著『天皇の短歌はなにを語るのか』）「阿部静枝の短歌はどう変わったか—無産女性運動から翼賛へ」（『昭和前期女性文学論』）、「阿部静枝の戦後—歌集『霜の道』と評論活動をめぐって」（『昭和後期女性文学論』）を寄稿した。これらの執筆の傍ら、追悼号の年譜の補遺のつもりで、著作や活動の調査を進めていた。資料の復刻やデジタル化も日進月歩の結果、これまで知らなかった膨大な著作や活動を見出すことができた。1945年以前、戦前分については、上記の「阿部静枝の短歌はどう変わったか」に付した年表で、ある程度まとめることができたが、補遺を続けている。「戦後編」については、活字にする機会がないまま今日にいたっているが、この度、一部ながら、本誌に掲載する機会をいただいた。次回以降掲載の年表について、若干の説明をしておきたい。

一覧の一行目には、その年に刊行の図書を記した。二行目の短歌作品欄には、掲載誌の月と作品の題名と歌数を示した。歌数のあるものはすべて現物を確認したとみてよい。ただ、『くさぶち』『ポトナム』に発表の作品は省いた。三行目は、作品以外の短歌関係の評論・エッセイ・歌集評などは短歌雑誌に限らず、わかる範囲で収録、現物を確認するよう努めた。四行目の欄には、短歌関係以外の執筆や発言を広く検索し、収録した。「婦人雑誌」に関しては別の必要から、ほぼ現物を確認しているが、それ以外は、国立国会図書館のデジタル資料の目次で確認したものが多い。一覧に見るように、その量もさることながら、掲載誌は多種多様にわたっていて、活動の広さとメディアからの期待がうかがわれる。備考欄は、かかわりのある歌壇での活動や私的な動向と政治活動の一部を掲載した。この記載に当たっては、読売新聞の「ヨミダス歴史館」、朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱ」を参考にした。

静枝は、一九四五年四月一三日夜から一四日未明にかけての「城北大空襲」によって、池袋二丁目の自宅を焼失している。ちなみに池袋一丁目の私の生家もこの夜、焼け出されている。

- ・爆風のしづむに伏せし身起せばこのゆく手にも火の手上れり  
（「戦塵」短歌研究 一九四五年九月）
- ・戦ひに敗れて身ひとつ残りたれうつる世見るを生きる甲斐とも  
（「この秋」短歌研究 一九四五年一二月）
- ・戦争に面従しつつ全うせる身の置きどころ野に耕せり
- ・満州に行けとわが説きぬ征き拓き斃れたる人目に頭ち迷ふ
- ・孤りいで耕す鋤の音澄みて秋日はしろし罪あるわれか  
（以上三首「街」人民短歌 一九四六年三月）

- ・過ぎし世のもの焼き果せる戦争を機にさらさらとあらたならずや  
(「みやこ」短歌季刊 創刊号一 一九四七年一月)
- ・芽ぶきたつ樹々を含めば山峽を荒るる吹雪にあかるさはあり  
(「北国」短歌往来 一九四七年九月)

一九四五年、復刊第一号の『短歌研究』九月号と一二月号、『日本短歌』一〇月号に作品を発表、翌年からは、短歌雑誌へは短歌を、女性雑誌などへは、評論家としての寄稿が始まる。一九四七年には、『ポトナム』の後掲誌『くさふち』が創刊、『ポトナム』が復刊されるなか、選者として会員の指導にあたった。さらに、『女人短歌』の立ち上げに参画、短歌総合誌などには、作品のみならず評論・エッセイにおいては、とくに、「女流」歌人と呼ばれていた女性歌人の自立と前進のための発信を続け、多くの女性たちを励ました。

さらに、一般的な評論などの寄稿の場は広がり、そのテーマは、新しい憲法下における、女性の生き方、教育、家族、結婚、労働、政治参加についてなど、多様である。また、「人生相談」の回答者としての活動も見逃せない。これは、大正末期から、夫、阿部温知とともに社会運動にかかわってきた実績、太平洋戦争期にあつては、翼賛に傾きながら歌人、評論家としての活動を続けてきた発言力が戦後も発揮され、期待もされたと思われる。一覽で見ると、その数、多忙さは、想像を絶するほどである。こうした状況が、一九五〇年代半ばくらいまで続く。その間、女人短歌会の活動、『女人短歌』の編集人として尽力、一九五〇年、自身も四半世紀ぶりに歌集『霜の道』を刊行、短歌のフィクション性について問題提起をしている。つぎの『女人短歌』の二首は、そのフィクション性をめぐって、葛原妙子との論争にもなった一連一〇首の一部である。五〇歳代に入り、すでに「老い」を感じる時代でもあつたのだろう。加えて、自分の死について向き合い、「毒薬を秘め持つ」という作品が散見できるのもこの時期で、静枝の最期を示唆するかのようであつた。

- ・罪ふかき国の宿命を吾も負いて生きられるだけ生きて見んとす
- ・老い崩れ寝しがよく寝しあけの日は眉晴々と仕事に励む  
(以上二首「春寒」短歌研究一九四九年六月)
- ・死にたければ死なん毒薬ひめもちてわが運命はわたくしすべし  
(「雑草」女人短歌 創刊号 一九四九年九月)
- ・物投げて怒りし夢ののがさもち朝庭に向く花らよ救へ  
(「夢」短歌研究 一九五一年一月)
- ・外に出ればあいの子と石打たるる子を傷の血も涙も黒きを流せ
- ・人間の種にかかはる智恵もたぬ犬ら素直に吾子と遊べり  
(以上二首「無題」女人短歌(16) 一九五三年六月)

一方、一九五一年四月の豊島区区議会議員選挙に日本社会党から立候補、第二位で、五五年七位、五九年二位という上位で当選、三期一二年間の議員生活が続いた。「女性」「評論家」「歌人」としての活動が大きく寄与していたのだろう。一九五三年二月二五日（第一五国会）、吉田茂内閣提案の栄典法案審議において、参議院内閣委員会で参考人として位階の廃止、褒章の簡素化など法案の一部削除の意見を公述しているが、結果的に、この

国会では衆議院審査未了で成立しなかった。栄典法案は、一九四八年にも、鳩山一郎内閣によって提出されているが、参議院審査未了で廃案、一九五六年、岸信介内閣によって提出されたが、次国会の継続審議となったが審査未了で廃案という経緯があり、結局、一九六三年七月、生存者叙勲については、池田勇人内閣によって電撃的に閣議決定され、今日に至っている。後述のように、位階の廃止を主張していた静枝だったが、晩年の一九七〇年、地方自治への貢献により「勲六等宝冠章」を受章している。

なお、一九四八年には、全織同盟の機関誌『友愛』の読者歌壇の選者にもなるが、一九五〇年代に入って、敗戦後の混乱がいささか落ち着いてくると、地元の豊島区での社会教育としての一環としての「短歌教室」、ローカル紙『豊島新聞』の歌会などが始まり、その講師や選者を務めた。また、いわゆるカルチャセンターの嚆矢とも言われる産経学園の短歌教室（池袋、浦和）の講師も務めるようになる。さらに、その後は、新聞歌壇（毎日新聞城北版、埼玉新聞歌壇、読売新聞東日本版）の選者をも務め、短歌の普及に貢献した。

なお、一九六〇年一月、日本社会党から分裂した民主社会党（一九六九年に民社党に改称）に参画し、政治活動を続け、あわせて『週刊民社』の歌壇の選者を務めることにもなった。（続く）

#### 阿部静枝（1899~1974）関係参考文献（太字は単行書を示す）

##### <追悼号・追悼文>

阿部静枝氏追悼	短歌研究	1974年10月
阿部静枝追悼特集 （追悼文多数及び著作目録・年譜）	ポトナム 586	1975年2月
阿部静枝追悼	女人短歌（103）	1975年3月
加藤克己：阿部静枝さんを悼む	埼玉新聞	1974年9月5日
遠山光栄：（題不明）	短歌公論	1974年10月
長沢美津：阿部氏を悼む	短歌研究	1974年10月
頼田島一二郎：秋草忌事始	短歌研究	1974年10月
生方たつゑ：明快だった阿部さん	短歌研究	1974年10月
頼田島一二郎：（題不明）	短歌新聞	1974年10月
君島夜詩：阿部静枝氏の印象	短歌	1974年11月
只野幸雄：散文精神を貫く—阿部静枝を悼みつつ	ポトナム（600）	1976年4月

##### <阿部静枝・短歌関係文献>

湯浅文春：阿部静枝評	詩歌	1936年2月
不破博：「女性教養」を読む	ポトナム	1941年6月
杉田鶴子：「女性教養」を読む	婦女新聞	1941年5月
藤田孝子：「女性教養」を読む	婦女新聞	1941年7月
五島茂：『霜の道』批評	女人短歌（6）	1950年12月
宮終二：『霜の道』評	女人短歌（6）	1950年12月
清水千代：『霜の道』評	女人短歌（6）	1950年12月

中河幹子：『霜の道』を読んで	短歌声調 (8)	1951年8月
尾崎孝子：阿部静枝『万華鏡』(歌壇新報社)		1957年
岡山巖：『冬季』評	女人短歌 (33)	1957年9月
富永貢：『野道』評	女人短歌 (54)	1962年12月
『野道』批評特集	ポトナム	1963年1月
尾崎磋瑛子：阿部静枝	国文学解釈と鑑賞	1964年1月
本多シズエ：無言の激励・阿部静枝	改革者	1965年7月
国崎望久太郎：阿部静枝歌集『野道』の世界	短歌研究	1965年5月
内野光子ほか：阿部静枝作品研究	ポトナム	1965年7月
増田文子：阿部静枝『現代代表歌人選集』(桜楓社)		1967年2月
小野昌繁ほか：座談会現代第一線作家論・阿部静枝篇1・2	短歌研究	1967年5月・6月
阿部静枝：私の歩いた道	ポトナム	1967年11月
寺西とく：『地中』評	女人短歌(77)	1968年9月
水野歌子：『地中』評	女人短歌(77)	1968年9月
頼田島一二郎：歌集『地中』の阿部静枝	短歌研究	1969年8月
阿部静枝：私の処女歌集	短歌公論	1973年12月
阿部静枝：自筆年譜ほか『阿部静枝歌集』(短歌研究社)		1974年3月
内野光子：阿部静枝著書解題並著作年表	ポトナム	1975年2月
福田たの子：阿部静枝	短歌研究	1977年11月
熊谷とき子：原阿佐緒・阿部静枝—その青春と恋(明治以降の女性歌10)	女人短歌 (115・116・117)	1978年3月・6月・9月
青木節子：秋草忌に思う	ポトナム	1979年12月
青木節子：阿部静枝序説1・2	ポトナム	1980年9月・11月
荻原欣子：(実証と点検) 阿部静枝の残したもの	ポトナム (700)	1984年4月
樋口美世：阿部静枝の人間像1・2	女人短歌 (143・144)	1985年3月・9月
『女歌人小論』(女人短歌会編 短歌新聞社 1987年1月) 所収		
毛利洋子：阿部静枝の晩年1~3	ポトナム	1985年9月・10月・11月
醍醐志万子：阿部静枝—社会派歌人への軌跡	短歌	1986年11月
中野菊夫：歌壇人物録10・阿部静枝	短歌	1987年10月
荻原欣子：秋草・阿部静枝	短歌現代	1990年2月
鈴木加奈：畏友阿部静枝(その一端)	ポトナム	1991年2月
荻原欣子：(物故歌人群像) 阿部静枝の口惜しき生	ポトナム (800)	1992年12月

- 荻原欣子：(歴史の群像) 阿部静枝一作品にみる生の軌跡  
ポトナム 1997年4月
- 内野光子：阿部静枝の敗戦前後の軌跡上・下  
ポトナム 1997年4月・6月
- 毛利洋子：阿部静枝人と作品—『冬季』『野道』その周辺  
ポトナム 1999年2月
- みやぎ女性史研究会：阿部静枝と社会性『みやぎの女性史』(河北新報社)  
1999年3月
- 内野光子：敗戦前後の阿部静枝—短歌評論を中心に  
ポトナム (900) 2001年4月
- 内野光子：阿部静枝 (先達を偲び、先達に学ぶ)  
ポトナム (900) 2001年4月
- 荻原欣子：無念の生 『歌人回想録2』(ながらみ書房) 2003年5月
- 荻原欣子：阿部静枝『秋草』『大正昭和の歌集』(『現代短歌別冊』)(短歌新聞社)  
2005年7月
- 内野光子：内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか1・2  
ポトナム 2006年1月・2月
- 『天皇の短歌はなにを語るのか』(御茶の水書房 2013年8月) 所収
- 菅原千代：『歌人阿部静枝とその精神性』(saga design seeds) 2008年8月
- 中野昭子：阿部静枝—凝視・意志の人 『ポトナムの歌人』(晃洋書房) 2008年11月
- 舟木澄子：阿部静枝の思い出—ふるさとの道  
ポトナム (1000) 2009年8月
- 江田浩司：石原純と阿部静枝の創作における前衛短歌への胎動  
歌壇 2012年5月
- 佐伯裕子：戦後短歌の時間軸—阿部静枝・葛原妙子・斎藤史  
短歌研究 2012年7月
- 中野昭子：(伝説の歌集Ⅱ) 阿部静枝歌集『秋草』  
短歌往来 2012年9月
- 菅原千代：『林うた(阿部静枝)歌集・さいはひ』(左右社) 2012年12月
- 内野光子：阿部静枝著作年表・戦前編 (~1945年)  
『天皇の短歌はなにを語るのか』(御茶の水書房 2013年8月) 所収
- 中野昭子：阿部静枝という歌人1~8~ (連載中)  
ポトナム 2013年10月、2014年11月、  
2015年11月、2016年12月、2017年12月、2018年11月、2019年11月、2020年11月
- 内野光子：阿部静枝の短歌はどう変わったか—無産女性運動から翼賛へ  
『昭和前期女性文学論』(翰林書房) 2016年10月
- 内野光子：阿部静枝の戦後—歌集『霜の道』と評論活動をめぐって  
『昭和後期女性文学論』(翰林書房) 2020年3月
- (『ポトナム』2021年3月号所収)

## 阿部静枝の戦後～歌人、評論家、政治家としての足跡（二）

付 「阿部静枝著作年表（一九四五年～）」及び「阿部静枝関係参考文献一覧」  
内野光子

本誌、二〇二〇年三月号において、右表題の（一）として、「阿部静枝関係参考文献一覧」と共に一九五〇年までの歌壇における足跡を作品とともに概観した。今回の「著作年表一九四五年～五〇年」との併読により、敗戦直後の阿部静枝の姿が、若干なりとも立ち上がってくるのではないかと思う。

この短い期間においては、短歌作品、短歌評論の執筆に加えて、夥しい数の、いわゆる「評論家」としての執筆や発言がみられる。さらに、一九四五年十一月には疎開先から上京し、歌人としての活動も開始する。まず、一九四六年三月、東京近辺在住の歌人たちが、自主的な歌壇の中央機関を目指して、静枝、筏井嘉一、窪田章一郎、五島茂、佐藤佐太郎、長谷川銀作ら十人が世話人となって立ち上げたのが「東京歌話会」である。翌年一月には『短歌季刊』を創刊し、静枝は、「みやこ」一四首を寄せた。五島美代子、北見志保子、水町京子、長澤美津、川上小夜子の作品が並び、一九四九年に発足する「女人短歌会」の主要メンバーにも重なる。編集後記によれば、事務局は中村正爾が担い、会として「政治的な行動にはタッチしない」との申し合わせがなされている。また、やや横道にそれるが、メンバーの一人、岡野直七郎は、創刊号より同人作品の英訳を連載していた。最近、山本武利『検閲官一発見されたGHQ名簿』（新潮社 二〇二一年二月）により、この岡野が占領軍の民間検閲局に検閲官として一九四五年一二月に採用され、翻訳の仕事をしていたことを知った。多くの日本人や二世たちがGHQの検閲業務に従事していたが、二〇一三年に発見された検閲者名簿により、その全容が分かるようになった。GHQの検閲は、新聞・雑誌・郵便物にも及び、多くの短歌雑誌もその対象となった。プランゲ文庫に残された検閲文書によれば、プレスコードに違反しそうな作品は、一首一首が英訳され、天皇制賛美、占領軍批判や原爆被害に触れたものは削除されていた。『短歌季刊』の短歌英訳と検閲官の仕事がつながっていたのである。

静枝は、『短歌季刊』二号（四七年九月）の「短歌と社会性において「戦争の始めも、終わった後も、同じ人が同じやうな歌ひぶりをしてあるといふのに対して自責反省しなければならない」とし、「皇室のおはさざりせばいかさまになりてあらまし我が国の態（窪田空穂）」「死し子はわが子にあらず神の子とあがめて思ひ諦らめよやと（柳原燐子）」などを引き、「老歌人の社会性の薄弱さ」を指摘、「これからの女の社会性はもつと深く食ひ込むべきである」と主張する。

この時期、戦前からの『短歌研究』『日本短歌』に加えて、創刊された短歌総合雑誌も少なくはない。『短歌季刊』（一九四七年一月～四九年三月）をはじめ、「第二芸術論」の論議の場ともなった『八雲』（一九四六年一二月～四八年三月 久保田正文編集）、『短歌往来』（一九四七年四月～四九年三月？ 高木一夫編集）、『短歌雑誌』（一九四七年一月～一九五二年一〇月、藤居教恵編集）などがある。『八雲』創刊号には、静枝も「短歌ルポルタージュ・進駐軍のいる風景」一〇首を寄稿した。創刊まもない『短歌往来』（四七年七月）の「女の歌よみ」では「過去の文学女性は才能の飾りにしたり社交の道具にして歌を作ったかもしれぬ。今日の女性にとって短歌はそのようなものではない」として、従来女の「狡さや、甘え、狭さなど」を排して、「作品と共に人間性を高めることである」と警鐘を鳴らし

ていた。『人民短歌』（一九四六年二月～四九年十一月 新日本歌人協会 四九年一二月「新日本歌人」に改題）は、当初、民主的短歌総合雑誌の感が強く、幅広い執筆者が登場する。静枝も、二号に「街」一〇首を寄せていた。結社雑誌も続々と復刊され、『ポトナム』も、四七年一月小泉荃三により『くさふぢ』として創刊され、一九五一年には、『ポトナム』の復刊につなげた。

一方、静枝の評論家としての執筆には、目覚ましいものがあり、そのメディアは多岐にわたる。講談社出身の原田常治によって創刊された『婦人生活』創刊号に、静枝は「選挙と私たちの生活」を執筆、まさに新しい憲法が施行された五月三日を目前にしてのことだった。静枝が毎号のように登場した『婦人生活』は、戦前からの『主婦の友』『婦人倶楽部』と一九四六年五月創刊の『主婦と生活』と並び、「四大婦人雑誌」と呼ばれ読者を大幅に増やしていた。また、四六年七月に創刊された『女性ライフ』にも、今日出海や武者小路実篤などとの対談や各界の大家を交えた、様々なテーマの座談会の司会や積極的な発言をこなしている。女性雑誌には欠かせない「身の上相談」や「人生相談」の回答者としての活躍も顕著である。これらの活動を可能にしたのは、女子高等師範学校時代から培ってきた歌人としての文化的教養と夫の阿部温知と共に政治活動に参加してきた実績、発言力が基盤にあったからにちがいがなかった。（続く）

（『ポトナム』2022年4月号所収）